

所沢織物の軌跡

～明治の所沢飛白と大正の湖月縮～

2019.6.23 記 池田 衛

■実施日：2019年6月20日(木) ■参加者：24名

■場 所：中央公民館 学習室 8・9号室 ■時 間：13:20～15:40

■講 師：野老澤歴史伝承人 三上博史 氏



■三八の市と織物の取引：

江戸時代に、秩父と江戸街道(江戸道)が開かれ、街道沿いに位置する所沢に宿場町が形成されました。江戸時代、所沢宿は近隣の物資の集散地として経済の中心的役割を果たすようになり、そこには市(三・八市)が立ちました。

幕末から明治時代にかけて、市の主要取引商品となったのが、縞木綿、紺木綿、絹綿交織の所沢織物です。中でも、紺木綿の「所沢飛白」は東北・北陸地方を中心に需要が高まり、生産量も飛躍的に伸びて、市の目玉商品となりました。

明治22年には、紺木綿の取引をめぐる縞屋と呼ばれる所沢の織物買継商が「織物仲買商組合」を設立し、「所沢織物市場」を開設しました。

市場は下町(御幸町)と金山町に設置され、それぞれ間口6間・奥行25間で、金山市場が「三」の日、下町市場が「八」の日の輪番制を取りました。しかし、市場開設後も旧来の慣行である縞屋と機屋(紺木綿製造業者)間の個別取引が後を絶たず、市場は事実上機能しない状況となり、わずか4年で閉鎖される結果となりました。

■紺から「飛白」へ：

所沢紺は、全盛期はその商標に「所沢飛白」を用いるようになりました。

紺木綿は買継商を通じて江戸を始め、東北三陸方面に出荷されていきました。集散地の名をとり「所沢紺」として世に知られるようになりました。綿織物の普段着の布地として価格が安いということもあり大衆品として急速に普及し、明治時代末期には最盛期を迎えました。

明治後期の隆盛は長くは続きませんでした。一部の機屋で売れ行きの良さに乗じた粗製乱造が行われ、信用を失墜しました。

明治 40 年代半ば以降からにわに低迷を始め、大正期に入るやいなや凋落の一途をたどりました。

大正期の所沢絣は関西以西の市場から完全締め出され、その主な需要先は関東および東北地方の農村部に限られていました。昭和初期になると、所沢絣の生産量は最盛期の五分の一以下にまで落ち込みました。

昭和初期には金融恐慌のあおりを受けて大暴落に陥ったのでした。さらに、昭和 4、5 年には絣の主産地である勝楽寺と上山口の一部が山口貯水池(狭山湖)の湖底に沈むことになり、移転を余儀なくされた機屋の多くは、これを機に絣生産に見切りをつけました。

■新しい織物の台頭：

所沢飛白の衰退の一途を辿りつつあった大正 6 年(1917)、日吉町で縞屋を営む平岡徳次郎が中心となって「湖月会」が組織されました。湖月会は、飯能の細田栄蔵を筆頭に、有力かつ技術に優れた機屋約 10 名を専属的な会員として傘下に擁し、「湖月縮」や女性を対象とする夏物新製品「湖月明石」などを開発し、関西を中心にその販路を拡大していきました。

明治 30 年代終わりの所沢の町場は、織物関係の店舗が軒を重ね、活気にあふれていました。

所沢織物業界を代表する絣木綿の生産は、明治 39 年から 40 年を最盛期として、その後一転して極度に落ち込みます。この間、平岡徳次郎は着々と地歩を固め、大正 4 年(1915)には、引退した向山小平次に代わって武蔵織物同業組合の評議員に選ばれました。引続き買継業部長副組長に歴任、所沢市場に集散する織物のみの組合として製品の宣伝上、組合の名称を所沢織物同業組合に改称しました。

■湖月会の結成：

大正 6 年(1917)(大正 5 年という説もある)に飯能の細田栄蔵を筆頭に、有力かつ技術に優れた県立工業高校などの経歴に準ずる学識と技術を兼備していることを会員資格とし、機屋約 10 名を専属的な会員として傘下に擁し、『湖月会』を結成しました。

湖月会は、一種の試作とプロダクションを行うトラスト組織というべきもので、会員が製造した新製品を平岡徳次郎がすべて買い取り、販売リスクを負いながらすべて捌きました。

湖月縮は「麻のようなさらさらした肌触りがよく、洗って縮まず、染が堅牢で、しわにならず、柄が豊富で、しかも値段も絹布明石の三分の一の特色があった」と言われ、夏のお洒落着として人気を博しました。

「湖月」は冬物を中心としていました。「新湖月」は、綿製品の高級品として、後には絹糸を交えたものも製造され、夏物を主体としていました。

■湖月会の販売促進：

湖月会では、関西をはじめ 6 大デパート向けの品評会を催したり、様々な宣伝活動を華やかに繰り広げています。これらの製品を全国に売るために、当時のファッション雑誌「婦人会」に毎回広告を出すなど湖月縮・湖月明石など所沢織物の売り込みを図っていました。

大正 11 年(1922)当時の一等地、元角三上という宿屋の跡地 181 坪(現元町交差点)に『所沢織物同業組合事務所』を建設しました。「白煉瓦の西洋館」などと呼ばれていました。初代組長には平岡徳治郎氏が就任しました。翌 12 年 2 月には機関誌として『組合月報』を創刊、自ら組合指導の論説を執筆したり、施設や製織の方針を研究するため全国各地の視察を奨励し、自らも足を運びました。

13 年には上野松坂屋に第 1 回宣伝大売り出しを挙行したり、翌 14 年には、新ほぐし織を研究して特許権を獲得するなど、短期間のうちに所沢織物と組合の発展に大きな貢献を果たしました。

■所沢織物業界の衰退：

戦前までは平岡徳治郎という強力なリーダーによって、所沢市場は活況を呈してきました。

昭和 2 年(1927)62歳という若さで早世したことは残念です。

戦後、戦時下統制を経てその活動が再開されましたが、所沢の縞屋は生産地への支配力を低下させ、所沢が集散地として存在する意味も失われていきました。

昭和 25 年(1950)には、縞屋が中心となって「所沢織物商工協同組合」を結成しますが、この時すでに所沢織物の基盤は揺らいでいました。織物業界の衰退から平岡次郎商店も閉店してしまい、現在の店蔵は取り壊されています。



担 当 A グループ 池田 衛 恩田 正子